

新型コロナ従来株向け 第一三共製ワクチン初承認へ

新型コロナ従来株向け 第一三共製

第一三共が開発した新規コロナワイルスワクチンについて、厚生労働省の専門家部会は31日、国内での製造販売の承認を了承した。国内の製薬会社では初めて。同時に審議された塙野義製薬が開発したコロナワクチンについては、臨床試験(治験)の結果では「有効性を明確に説明する」ことが難しく、「判断し、結論を次回以降に持ち越した。

いずれも従来株のワクチン向けで、今秋以降の接種で使用する対象とはなっていない。

第一三共のワクチンは第一製のワクチンが国内でも使われていた。その

兩社製と同じタイプの messenger-RNA (mRNA) ワクチン。2回接種を終えた高齢者を含む18歳以上を対象に接種が、65歳以上の高齢

た国内での臨床試験で、有効性と安全性を確認した。
現在のコロナワクチン接種が、65歳以上の高齢

海外製ワクチンの接種が始まつてから2年余り。「周回遅れ」との指摘もあるが、専門家は意義は大きいとする。

日本のワクチン開発はなぜ遅れたのか。第一三共が治験を始めたのは21年3月。すでに米ファイザー製のワクチンが国内でも使われていた。その

「周回遅れ」でもノウハウ蓄積

後、米モデルナ製のワクチン開発には時間がかかり、製薬企業からすれば

平時の感染症分野への投資は採算性が低い。

海外では「mRNA」

を基に使う基礎があつた。

これが大きい。ワクチンが流行し、ワクチン開発への関心は高かつた。コロナ流行後、米国のような政権(当時)が有望なワクチン候補として兆田規模の資金を投じる中、日

者や基礎疾患のある人、医療従事者が対象。9月以降は、2回接種を終えた全ての世代が対象となる見込み。厚労省は今後の接種では、オミクロン株の亜系統「XBB」に対応のワクチンを使う方針で、今回承認が了承された第一三共のワクチンは対象外。第一三共はオミクロン株に対応したワクチンの実用化を急いでいる。(神宮司)

本の当初の予算額は100億円。基礎研究の積み重ねと、危機意識の差が、開発の進捗を左右した。北里大・大村智記念研究所の中山哲夫・特任教授

は「従来株対応のワクチンの追加接種は現実的ではない、オミクロン株対応のワクチン製造に向かうべき」と意義を強調する。(藤森和也、藤原一也)

「次のパンデミックに備え、外國産のワクチンに頼る」となく、「ノウハウを蓄積しておいて」とは重要な見込み。厚労省は今後の接種では、オミクロン株の亜系統「XBB」に対応のワクチンを使う方針で、今回承認が了承された第一三共のワクチンは対象外。第一三共はオミクロン株に対応したワクチンの実用化を急いでいる。(神宮司)